目次

はしがき……一
解説……九
奥の細道
一、武蔵の部……二三
イ、深川（月日は百代の過客にして）……二三
ロ、千住（弥生も末の七日）……二七
ハ、草加（今年元禄二とせにや）……三〇
二、下野の部……三三
イ、室の八島（室の八島に詣す）……三三
ロ、日光（此の日、日光山の麓に泊まる）……三六
（卯月朔日、御山に詣拝す）……三八
（二十余町山を登って滝有り）……四三
ハ、那須の黒羽へ（那須の黒羽といふ所に知る人あれば）……四五

二、黒羽・那須八幡宮（黒羽の館代）……四七
ホ、光明寺（修験光明寺と云ふ有り）……五〇
ヘ、雲巌寺（当国雲巌寺のおくに）……五一
ト、殺生石（是れより殺生石に行く）……五四
チ、蘆野（又清水ながるゝの柳は）……五六
三、磐城・岩代の部……五八
イ、白河の関（心許なき日数重なるまゝに）……五八
ロ、須賀川（とかくして越え行くまゝに）……六一
（此の宿の傍に）……六三
ハ、浅香・忍の里（等窮が宅を出でて五里斗り）……六五
（あくれば）……六八
二、丸山（月の輪のわたしを越えて）……七〇
ホ、飯坂温泉・伊達の大木戸（其の夜飯塚にとまる）……七二
四、陸前の部（1）……七五
イ、笠島（鐙摺・白石の城を過ぎ）……七五
ロ、武隈の松（武隈の松にこそ目覚むる心地はすれ）……七七

ハ、仙台・宮城野（名取川を渡りて仙台に入る）……八〇
ニ、奥の細道（かの画図にまかせてたどり行けば）……八三
ホ、多賀城址（壺の碑）……八四
ヘ、末の松山・塩竈の浦（それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ）……八七
ト、塩竈の明神（早朝塩竈の明神に詣づ）……九〇
チ、雄島・松島（抑も事古りにたれど）……九四
リ、瑞巌寺（十一日瑞岩寺に詣づ）……一〇〇
ヌ、石の巻（十二日）……一〇一
五、陸中の部……一〇五
イ、平泉―高館（三代の栄耀一睡の中にして）……一〇五
ロ、光堂（予て耳驚かしたる二堂開帳す）……一〇九
六、陸前の部（2）……一一三
ル、尿前の関（南部道遙かにみやりて）……一一三
七、出羽の部……一一五
イ、最上の庄へ（あるじの云ふ）……一一五
ロ、尾花沢（尾花沢にて清風と云ふ者を尋ぬ）……一一八

ハ、立石寺（山形領に立石寺と云ふ山寺あり）……一二〇
ニ、大石田（最上川乗らんと）……一二三
ホ、最上川（最上川はみちのくより出でて）……一二四
ヘ、羽黒山（六月三日羽黒山に登る）……一二七
ト、月山・湯殿山（八日月山にのぼる）……一三一
（谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り）……一三三
チ、鶴ケ岡・酒田（羽黒を立って）……一三八
リ、象潟（江山水陸の風光数を尽くして）……一四〇
八、出羽・越後の部……一四七
イ、鼠ケ関・佐渡（酒田の余波日を重ねて）……一四七
ロ、親知らず・市振の関（今日は親しらず子しらず・犬もどり・駒返しなどいふ北国一の難所を越えて疲れ侍れば）……一五二
九、越中・加賀の部……一五七
イ、黒部四十八ケ瀬・那古の浦（黒部四十八か瀬とかや）……一五七
ロ、倶利伽羅が谷・金沢・小松（卯の花山・くりからが谷をこえて）……一五九
ハ、太田神社（此の所太田の神社に詣づ）……一六三
ニ、那谷（山中の温泉に行くほど）……一六六
ホ、山中温泉（温泉に浴す）……一六九
（曽良は腹を病みて）……一七一
ヘ、全昌寺（大聖寺の城外）……一七三
十、越前の部……一七六
イ、吉崎の入り江（越前の境）……一七六
ロ、天龍寺（丸岡天龍寺の長老）……一七七
ハ、永平寺（五十町山に入りて永平寺を礼す）……一七九
ニ、福井（福井は三里斗りなれば）……一八一
ホ、敦賀（漸く白根が嶽かくれて）……一八四
ヘ、気比明神（その夜月殊に晴れたり）……一八五
ト、種の浜（十六日空霽れたれば）……一八九
十一、美濃の部……一九二
イ、大垣（露通も此のみなとまで出でむかひて）……一九二
俳句索引……一九六
図版

素龍清書本冒頭・芭蕉自筆外題「おくのほそ道」……扉（表）　三山巡礼の句の短冊……扉（裏）
奥の細道随行日記五月十五日―十七日・「高久の宿」の懐紙・芭蕉庵採茶庵位置図……口絵
奥の細道足跡地図……巻末
表八句と懐紙……二六
このしろ……二四
日光山……二一
かさね……二〇
殺生石……一五
「野をよこに」の句の小切……一五
もぢ摺り石……一九
実方の塚……一七
あせび……一二
多賀城碑文……一六
和泉三郎寄進の灯籠……一九
松島・雲居禅室の額……九
金華山……一〇三
高館から衣川を望む……一〇四
兵どもが夢の跡……一〇八
平泉旧跡現状対照図……一〇九
光堂彌陀三尊・覆堂……一一〇
まゆはき……一一九
にいにい蟬……一一三
立石寺……一一三
湯殿山……一一九
出羽三山……一二〇
象潟……一二三
ねむの花・みさご……一二五
念珠の関……一一九
杉風書簡……一二四
俱利伽羅谷……一六二
実盛の兜・義仲の願文と伝えられるもの……一六五
白山・那谷寺……一六八
雲版・食堂……一七五
道元禅師像並びに筆跡・永平寺……一八〇
福井の等栽……一八二
気比神宮……一八八
種の浜・法華寺本隆寺……一九一

奥の細道解説

『奥の細道』は、松尾芭蕉を代表する作品の一つであって、彼れとして完成せられた俳文紀行である。芭蕉は元禄二年三月二十七日、門人河合曽良を伴なって江戸を発足した。これが、奥羽から北陸を回って、九月六日、伊勢の遷宮を拝もうと、また舟で大垣を出で立つまでの、前後七箇月、道のり六百里に及ぶ『奥の細道』の大旅行となったのである。『奥の細道』というのは、本文の中に「奥の細道の山際に」とあるように、仙台から多賀城址を近くしたあたりの街道の名をとったものである。

『奥の細道』の成るまでには、芭蕉は紀行として『野晒紀行（甲子吟行）』『鹿島紀行』『卯辰紀行（笈之小文、芳野紀行）』『更科紀行』を手がけていた。この経験を踏まえて、俳境においても著しい進展を見せたこの元禄二年の大旅行を取り上げ、『奥の細道』を成すに至ったのである。しかも、この紀行は、初稿を得てから推敲に推敲を重ねて、彼れの没年である元禄七年に及んで定稿となったのであろうと推定せられる。山本六丁子編『曽良奥の細道随行日記』が出版せられた昭和十八年は、芭蕉の二百五十回忌と生誕三百年祭とに当たったのであるから、この紀行の完成せられてから二百四十九年を数える年であったわけである。この編書に收められた『随行日記』『俳諧書留』などによって、『奥の細道』の創作的結構ともいうべきものが確かめられると共に、その他の資料とあわせて、その発句や構文についての推敲、改稿の跡をうかがうこと

評釈 無常を思う芭蕉、自然に投じようと願う芭蕉が、同時にあたたかい人間の愛情を限りなくなつかしんでいる。その悲痛な思いは、さりげなく俳諧のヴェールに透かされ色どられ、自然は旅を仲立ちとして人生と交錯せしめられている。

この部分は、又結びの「又舟にのりて」という次の出発と照応していることを注意しなければならない。

ハ、草　加

（今年元禄二とせにや）

ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪の恨（み）を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若（し）生（き）て帰らばと定（め）なき頼（み）の末をかけ、其（の）日漸く早加と云（ふ）宿にたどり着（き）にけり。痩（せ）骨の肩にかゝれる物先（づ）くるしむ。只身すがらにと出（で）立（ち）侍（る）を、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打（ち）捨（て）がたくて、路次の煩（ひ）となれるこそわりなけれ。

校注 ○早加―草加。○紙―本「帋」。○一衣―菊本氏所蔵伝去来真跡本「ひとへ」。

通釈 今年即ち元禄二年のことであるが、はるかな奥州出羽方面をめぐる長い旅を、至って簡単にする気になって、遠い旅の空に苦労をして、たゞでさえ白くなってゆく髪をいよいよ白髪にしてしまわなければならないなげきをすることになるわけではあるが、この年まで耳にはその所の話しは聞いていながらまだ目には実際に見ていない地方へ、出かけるのであるから、それを実際に見ることができて、その上で万一命があって帰ることができたら、それこそありがたいことではないかと、あてにならないはかない後々のことをたよりにして歩く始末で、出発の日の二十七日には、やっとこさの思いで、草加といふ宿駅に行き着いたのであった。

（『卯辰紀行』にも書いたように、）旅のはじめに、痩せて肉のない肩にかかっている旅の荷物が、まっさきに私を苦しめる。ほんのからだ一つでというつもりで出かけはしたのであるが、紙子一着は夜の防寒用に必要であるし、ゆかた・雨具・墨・筆というようなものもなくては困るし、あるいは辞退しかねる餞別なんかとしてくれられたりした品は、なくてもすむものではあるが、そうは思うものの、せっかくの好意を取り上げないわけにもゆかなくなって、それらのものが、道中の苦労の種になったのは、何とも致し方のないことであった。

語釈 にや―「にやあらむ」と、わざと確かに言いきらない文の技巧。　行脚―音は唐（宋）音。僧が諸国をめぐって修行すること。諸国をめぐり歩くこと。　呉天に白髪の恨みを重ぬ―「九日宴集醉題二郡楼一兼呈二周殷二判官一」（白楽天）「去年九日到二東洛一。今年九日来二呉郷一。両辺蓬鬢一時白。三処菊花同色黄。」（去年の九日には東洛に到り、今年の九日には呉郷に来たれり。両辺の蓬鬢一時に白く、三処の菊花同色に黄なり。）（三処は余杭郡・東洛・呉郷。）、閩僧可士、送レ僧詩「一鉢即生涯。随レ縁度二歳華一。……笠重呉天雪。鞋香楚地花。」（一鉢即生涯、縁に随って歳華を度る。……笠は重し呉天の雪、鞋は香し楚地の花。）、謡曲「竹雪」「いつを呉山にあらねども、笠の雪の重さよ、老いの白髪となりやせん。」などによったものであろう。（「今年元禄二とせにや、」の書き出しにも、「今年九日」などの句を頭においているのかも知れない。）　早加―草加、武蔵の国北足立郡。「早」は「草」の通字書き。曽